

口絵 九州北部の麦作で問題となるタデ科雑草

(独) 農研機構 九州沖縄農業研究センター 大段秀記



写真-1 サナエタデが繁茂した麦作圃場



写真-4 ハルタデの花穂



写真-2 サナエタデの花穂



写真-5 ハルタデの葉



写真-3 サナエタデの葉



写真-6 ハルタデが繁茂した麦作圃場



写真-7 ヤナギタデの花穂



写真-10 ニオイタデの茎葉



写真-8 明瞭な斑紋があるヤナギタデの葉



写真-11 ニオイタデの花穂



写真-9 イヌタデの花穂



写真-12 ニオイタデが繁茂した麦作圃場



写真-13 開花時期のミチヤナギ



写真-16 ママコノシリヌグイの鋭いトゲ



写真-14 ウナギツカミの茎葉

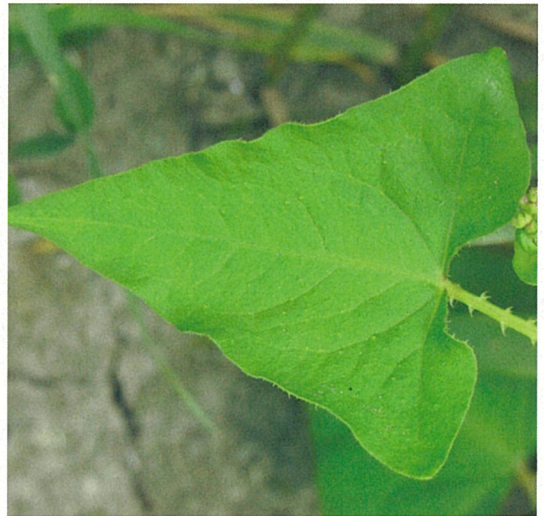


写真-17 ママコノシリヌグイの葉



写真-15 ウナギツカミの花序



写真-18 ママコノシリヌグイの花序

九州北部の麦作で問題となるタデ科雑草

2011年頃から九州北部の広い範囲の麦作圃場において、サナエタデやハルタデが繁茂する圃場が増加しており、収穫放棄や翌年の麦の作付けを断念するなど深刻な問題となっている事例もある。それ以前にも、極めて限られた圃場でサナエタデやハルタデが繁茂している圃場を確認していたが、広範囲に問題となることはなかった。さらに、サナエタデやハルタデ以外のタデ科雑草も明らかに増加傾向にあり、現地調査を行なったところ、8種のタデ科雑草が問題となっていると確認された(大段 2013)。本稿ではこの8種のタデ科雑草について紹介する。なお、イヌタデ属の植物は形態の変異が大きく(米倉 2012)、種の種類についても多様な見解がある。本稿では米倉(2012)の見解に従って学名を記した。

1. サナエタデ

Persicaria lapathifolia (L.) Delarbre var. *incana* (Roth) H.Hara

8種の中でもっとも広い範囲で確認された。圃場全体に繁茂し(写真-1)、著しい雑草害を引き起こしていると考えられる圃場も多かった。花穂の長さは4~5cm程度でやや太く、まっすぐかやや曲がっており、赤色と白色が混じっている(写真-2)。葉の表面には黒い斑紋があるが(写真-3)、ない場合もある。また、サナエタデにはほとんど毛がないが、ウラジロサナエタデと呼ばれる葉や茎、托葉鞘に綿毛が密生する個体もある。麦作圃場では2月上旬~中旬に発生が始まり、畦間や欠株部分など麦の生育が悪い場所では特に生育旺盛で、収穫時期には、草丈が麦と同等以上になる。

2. ハルタデ

Persicaria maculosa Gray subsp. *hirticaulis* (Danser) S.Ekman et T.Knutsson var. *pubescens* (Makino) Yonek.)

サナエタデによく似るが、花穂はやや細く、まっ

すぐで、やくすんだ赤色と白色が混じる(写真-4)。葉の表面には大きな斑紋がある(写真-5)。麦作圃場では1月下旬~2月上旬から発生し、サナエタデよりやや早く発生が始まる。わずかに年内に発生する個体もあるが、ほとんどは越冬できない。畦間や欠株部分など麦の生育が悪い場所では特に生育旺盛で、収穫時期には、草丈が麦と同等以上になり、繁茂圃場(写真-6)での雑草害はサナエタデよりも大きい。

3. ヤナギタデ

Persicaria hydropiper (L.) Delarbre

マタデやホンタデとも呼ばれる。葉には辛味成分が含まれており、葉をかじって辛味を感じれば本種である。サナエタデやハルタデに比べて花穂には小花がまばらにつく(写真-7)。托葉鞘には3mm程度の長さの縁毛がある。葉は斑紋がないとされるが、明瞭な斑紋のある個体を確認している(写真-8)。麦作圃場での発生はサナエタデよりもやや遅い。ヤナギタデのみが繁茂している圃場はほとんどないが、サナエタデやハルタデと混生して雑草害を引き起こしていると思われる圃場は多い。

4. イヌタデ

Persicaria longiseta (Bruijn) Kitag.

夏雑草のイメージが強いが、収穫時の麦作圃場で繁茂し、結実することもある。草丈は30cm程度でサナエタデやハルタデほど大きな雑草害はないと考えられるが、著しい繁茂の場合は収量、品質に影響を及ぼす可能性もあると考えられる。アカマンマとも呼ばれ、薄いピンクがかかった花穂をつける(写真-9)。

5. ニオイタデ

Persicaria viscosa (Buch.-Ham. ex D.Don) H. Gross ex T.Mori

遠目にはサナエタデやハルタデに似るが、全身に長い毛があり(写真-10)、鮮やかな紅色の花穂をつける(写真-11)ことから区別は容易にできる。

葉の表面に斑紋があるものとなないものがある。熊本県内の一部の地域に局地的に確認している。草丈は麦と同程度であるので、繁茂圃場(写真-12)では雑草害を引き起こしていると考えられる。

6. ミチヤナギ

Polygonum aviculare L. subsp. *aviculare*

九州の麦作では一般的な雑草である。他のタデ科雑草よりも発生は早く、麦播種後から発生し、越冬する。草丈は30cm程度であるが、生育条件によっては70cm程度になることもあり、繁茂すると雑草害を引き起こす可能性がある。花はつぼみの時には緑が紅紫色で、開花すると白い花(写真-13)をつけるが、花卉ではなく萼である。

7. ウナギツカミ

Persicaria sagittata (L.) H.Gross var. *sibirica* (Meisn.) Miyabe

茎に短いトゲがあり(写真-14)、このトゲがうなぎを掴むにはうってつけであるように見えることから、この名がつけられたと言われている。茎はつる状に伸長し、草丈は1m程度になる。葉は長卵形で先端は鈍く、基部は矢じり形で茎を抱く(写真-14)。花は十数個が茎の先端に頭状に固まってつく(写真-15)。サナエタデなどと混生していることが多いが、ウナギツカミのみが繁茂している圃場も確認している。トゲは鋭くはないが、素手で除草するのは困難である。

8. ママコノシリヌグイ

Persicaria senticosa (Meisn.) H.Gross

茎や葉柄に鋭いトゲがあり(写真-16)、茎はつる状に伸びる。葉は三角形で基部が心形をしており(写真-17)、裏面の脈上にもトゲがある。花は十数個が茎の先端に固まってつく(写真-18)が、ウナギツカミよりも大きい。種子は大きく、収穫物に混入すると篩別は困難である。鋭いトゲがあることから収穫時に手取り除草をすることは困難である。幼植物体にも鋭いトゲがあることから、除草剤での適切な防除が不可欠である。サナエタデなどと混生していることが多いが、マ

マコノシリヌグイのみが繁茂している圃場も確認している。繁茂がひどい圃場では翌年以降の作付けを断念している事例もみられる。

前述した8種以外にもアオヒメタデ(*Persicaria erectominor* (Makino) Nakai var. *erectominor* f. *viridiflora* (Nakai) I.Ito)と思われる小型のタデを見かけるが、完全な同定には至っていないので、詳細は次の機会としたい。また、本年の麦作においてイシミカワ(*Persicaria perfoliata* (L.) H.Gross)が特異的に繁茂する圃場が1筆のみ確認された。イシミカワは水路脇や耕作放棄地で繁茂しているのを確認することがあるが、繁茂圃場は前年まで耕作放棄地ということであった。

以上のように、九州北部の麦作圃場では8種のタデ科雑草が問題となっている。ミチヤナギは以前から麦作の雑草として広く発生しており、ママコノシリヌグイも特殊雑草として研究事例がある(矢野・真鍋 1989)が、その他のタデ科雑草については局地的に問題となる程度に発生を認めたことはあったが、ほとんどは急激に問題化している。この原因については明確ではないが、除草体系の変化が一つの要因として考えられる。タデ科雑草の多くは「春雑草」であり、2月以降に発生が認められる。したがって、播種後土壌処理剤の効果はほとんど期待できず、生育期茎葉処理剤での防除が必要となる。しかし、除草剤抵抗性スズメノテッポウの問題が顕在化し、対策除草剤が使われるようになってからは2月初・中旬に処理していたチフェンスルフロンメチルの利用が明らかに減少しており、結果的にタデ科雑草の繁茂を許している可能性がある。また、近年の気象条件の変化もタデ科雑草が増加している一つの要因になっている可能性があるが、タデ科雑草の麦作圃場での発生生態は未解明な点が多く、今後詳しく調査する必要がある。

引用文献

- 大段秀記 2013. 九州北部の麦圃で問題となっているタデ科雑草の種類と発生状況. 九州の雑草 42, 4-8.
 矢野雅彦・真鍋尚義 1989. 麦圃における特殊雑草の防除. 九州の雑草 19, 10-14.
 米倉浩司 2012. 邑田仁監修「日本維管束植物目録」. 北隆館, 東京, pp.154-158.